

坂中先生を偲んで

南山大学人文学部心理人間学科 土屋 耕治

坂中正義先生を偲んで、彼との出会いで私が受けた影響について書き留めておきたいと思う。傾聴という言葉を見ると先生を思い出すとか、赤のApple製品がお好きだったとか、そうしたことはたくさんあるが、改めてふりかえてみて、最後の方で坂中先生との間で起こった内省的な対話について紹介したいと思う。

先生の休職が決まり、人間性心理学ゼミが最後に歩ききるまでサポートをさせていただく機会を得た。最後に文集を作ることになり、坂中先生に1ページ書いてもらえないかとお願いしてメール上でいくつかのやりとりをした。

今思えば、集中して詰めて考えるということが難しいというご事情もあったのかもしれないが、先生が「連想したこと」として、心に浮かんだことを紹介してくださったり、私についても言葉をかけてくださった。私も言葉を受けながら、思い出したこと、先生から受けた影響、一緒に過ごした時間などを思い出し、記して返していった。

このときのことを思い出すと、坂中先生と、またその言葉に触れ、自分の中で起こってきたことを響かせるようなとても豊かなやりとりであったと、その感触を覚えている。

日常で私たちは「共通の理解をしたい」と思いすぎているのかも知れない。今、話を聞いて関連して考えたこと、連想して考えたこと、思い浮かんだことをただ自分のなかに響かせ、言葉になるものがあれば言葉にしてみる。そういうことで十分なのではないか。ふと注意が向いたこと、思い出した断片、引っ掛かりとして目が止まったこと、そうしたことの中に、今までの生きてきたこと、出会ってきたことは全て現れ含まれるのだから変に取り繕わずに、そうしたことをふと相手に紹介するということではよいのではないか。

それは、坂中先生が『傾聴の心理学』（2017）で書かれていた「相手への〈肯定的関心〉〈共感的理解〉を自分自身にも向けていくことが〈一致〉である」ということも思い出させる。沈黙のなかに、実現傾向を信じ、耳を傾けていく。そうした態度を自分自身に対しても持つことなのだろう。

聖書のなかで、聖母マリアに関する記述は多くはないが、その人物を知るのに次のような一節がある。

「マリアはこれらのことをことごとく心に留め、思い巡らしていた（ルカ 2・19）」

起こってくることを心に留め、自身のなかに響かせていく。坂中先生を偲んで、心に浮かんだことであった。

引用文献

坂中正義（編）（2017）. 傾聴の心理学: PCAを学ぶ カウセリング・フォーカシング・エンカウンター・グループ 創元社